

「規定の病を患う人」

2021年10月25日

イエスが深く憐れんで、手を差し伸べてその人に触れ、「私は望む。清くなれ」と言われると、たちまち規定の病は去り、その人は清くなった。(マルコ福音書1章41節～42節)

主イエスが宣教しながら歩いていると、規定の病を患っている人が来て、ひざまずいて、「お望みならば、私を清くすることができます」と言って、癒しを懇願した。「規定の病」とは何か。口語訳聖書では「らい病」、新共同訳聖書では「重い皮膚病」、聖書協会共同訳は「規定の病」と訳している。ギリシア語聖書は「レプロス」で「らい病」と書かれている。日本では、「らい病」という言葉は不快用語で、「ハンセン病」と言われている。マルコ福音書の著者は「ハンセン病」と認識していたであろうが、聖書学では、彼はハンセン病患者ではないと、「重い皮膚病」「規定の病」と訳しているのである。「規定」とは、レビ記13章に詳しく記されている。皮膚に出来物ができ、皮膚の下まで侵された場合、「規定の病」と認定され、「汚れている」と言い渡される。この認定は祭司がする。「規定の病を発症した人は衣服を引き裂き、髪を垂らさなければならない。また口ひげを覆って『汚れている、汚れている』と叫ばなければならない。その患部があるかぎり、その人は汚れている。宿営の外で、独り離れて住まなければならない(レビ記13:45～46)。」

ハンセン病患者が感染を恐れられ、隔離されたように、「規定の病」を患った者は汚れた者として、共同体から完全に排除された。彼が主イエスのところに来たことは律法に反する行為である。癒しを求める言葉も「お望みならば、私を清くすることができます」と、極めて控えめに言っている。主イエスは彼を見て、深く憐れまれた。この憐れみは上から目線で同情したのではなく、腸が千切れるほど、彼の痛み、悲しみの場に立たれたということである。そして、彼の体に触れた。人は彼を見て逃げ出すか、石を投げたであろうが、主イエスは手を伸べて触れてくださった。この行為だけで、彼はどれほど慰められたであろうか。主イエスは「私は望む。清くなれ」と宣言された。彼の望みに応じられたのである。主イエスが宣言すると、規定の病は去り、その人は清くなった。イザヤ書53章の「主の僕の歌」で、「彼が担ったのは私たちの病／彼が負ったのは私たちの痛みであった(イザヤ53:4)」と歌っているが、主イエスは「規定の病」に苦しむ者の病を担われたのである。

病を患っていた人はどれほど喜んだであろうか。「お前は律法に違反している。向こうへ行け」とは言われず、彼の苦しみ、悲しみと同じ思いになり、彼が望んだように、主イエスも望み、「清くなれ」と宣言して、癒してくださった。病が癒された喜びはもちろん、共同体に復帰でき、共に生きる隣人を得ることができることは何よりの喜びであった。

主イエスは二つのことを命じておられる。一つは「誰にも、何も話さないように気をつけなさい」である。もう一つは「行って祭司に見せ、モーセが定めた物を清めのために献げて、人々に証明しなさい」である。「規定の病」から清められた者は、祭司に証明してもらい、規定の献げ物をして、共同体に復帰できる。「ハンセン病」は、1940年代に「プロミン」という特効薬ができ、治癒できる病となった。日本の場合、治癒できる病であるにもかかわらず、隔離政策を続け、ハンセン病患者の人権を著しく阻害した悲劇があった。

癒された彼は、主イエスの命令を破り、癒されたことを触れ回り、言い広めたので、主イエスは表立って町に入ることができず、寂しい所に引き籠られた。それでも、人々は主イエスを捜し出し、多くの群衆が群がった。